

嬉望

第11号
平成27年2月27日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
大学院生編集部

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



大学マスコット

改善プラン発表会

1月25日(日)、2月1日(日)と二週にわたって、平成26年度学校改善プラン・教育行政改善プラン発表会が神戸ハーバーランドキャンパスにて行われました。

二年間の学びの集大成を披露する場として、非常に緊張しながらも、どこか誇らしげに発表し、質疑応答にも自信を持って堂々と返答する二年生の姿。

来年のこの時期に、同じように発表できるのかと焦りすら感じた一年生にとつて大変眩しく映るものでした。

なお、当日ご多用の中、足をお運び頂いたご来賓及び支援者の皆様には、この場を持って改めて御礼申し上げます。本当に有難うございました。

①高濱禎彦 教諭 鳥取県境港市立第一中学校 改善プラン

「目指す子ども像」を地域と共有する学校づくり
『地域に出て行く』『地域を取り入れる』取組を通して」

鳥取県境港市は、「魅力と活力あふれるまち 心豊かに安心して暮らせるまち」をまちづくりビジョンに掲げています。境港市教育委員会が掲げる「境港市教育推進の重点」やインターンシップ中に行ったアンケートの結果から、「現状を把握し、それに即した組織体制を作ろう」「学校内完結ではなく、教育活動に地域の力を活用したい」と考えました。そこで、「学校地域活性化推進委員会を中心とした組織改善」や、地域に



高濱禎彦 教諭

出て行く取組として、総合的な学習の時間『境港学』を再構築することの2つを改善の柱とする「目指す子ども像」を地域と共有できる学校」を目指す改善プランとして発表しました。

②田中栄一 教諭 鳥取県鳥取市立中ノ郷中学高 改善プラン



田中栄一 教諭

「小中一貫カリキュラムを中心
に地域で一体となる学校づくり」

インターンシップで現任校を訪れた際に、以前にも増して学習や諸活動に前向きに取り組んでいる生徒を見て、ポジティブ・アプローチによる改善プランにすべきだと考えました。そして、鳥取の未来を切りひらく力とは何かを考え、現任校で付けた力を「地域創生のニューフロンティ

ア」と位置づけました。「小中研究会」や「地域教育会議」などによる組織作りと、カリキュラム・マネジメントによる仕組みづくりの2つを土台として、「小中一貫カリキュラムの編成・実践」を学校改善の柱とするプランを発表しました。これにより、「問題発見解決力・創造力」「人間関係形成力」「社会参画力」などの「つきたい力」を育むことをねらいます。

③鳥羽道仁 主幹教諭 鳥取県米子西高等学校 改善プラン

「キャリア教育を基盤とした学校組織・運営体制の構築について」
主幹教諭の役割と位置づけに関して、より効果的な方法を探求する中で、その機能を最大限に活かしながら「キャリア教育」を導入しようと考えました。

キャリア教育により「自立する力」とともに歩む力」の2つの力を追求していくことで、「自分の力を理解し、足らざる力を補いながら、社会(地域)に貢献できる生徒」の育成を目指すことができます。そこで、「自分の力を理解し、足らざる力を補いながら、社会(地域)に貢献できる生徒」を目指す生徒像とする総合的な学習の時間『みらい燦爛活動』を提案しました。改善プラン実現に向けて、主幹教諭が中心となった組織づくりと併せてカリキュラムを発表しました。

④青山武司 教頭 山口県周防大島町教育委員会 改善プラン



鳥羽道仁 主幹教諭

「だれもが『通わせたいくなる学校』づくりをめざして」

周防大島教育委員会においてインターンシップを行い、教育委員会と学校との関わりだけでなく、町全体のために教育に何ができるかという広い視野に立つて改善の方向を示しました。

「定住対策」が町の最重要課題であることや、教育が町の重要施策の一つとして地方行政施策に位置づけられていることから、「町民はもちろん、移住して子どもを通わせたいくなる学校づくり」を改善の方向性として示しました。「周防大島町教育の水準」を町内に徹底させるために、『周防大島町教育の水準』リーフレット作成プロジェクト」をすでに立ち上げる等、教育改革にも着手しています。そして、学校の構成要素である「環境」「費用」「生徒指導」「学力」をいかにして整えるか、具体的な取組とそこで得られる効果を踏まえて発表しました。



青山武司 教頭

**⑤原田隆史 教諭
山口県山口市教育委員会
改善プラン**

「コミュニティ・スクールの充実に向けて」

山口市では平成24年度から、全小中学校に学校運営協議会が設置され、地域と共にある学校づくりを進めています。

学力・学習状況調査の結果や、学校長、教職員、そして地域住民への聞き取りやアンケートなどの実地調査を行った結果、山口市のコミュニティ・スクール推進の目的や方向性を、市、教育委員会、学校の間でより共有を深めることで、一層の充実が図れると現状を分析しました。

市としての方向性を示し、学校や地域の実態に即した支援を行うことを改善の方向性として考え、市内6地域の特性に応じて学校との関係性の段階を想定した取組を提案し、また、課を横断した連携体制についても提案しました。そうして、地域からの信頼に基づく地域の願いが反映された「地域立」学校づくりを目指していきます。



原田隆史 教諭

**⑥松岡千鶴 教頭
山口県宇部市教育委員会
改善プラン**

「教育委員会活性化及び学校の自主性・自律性の確立のための宇部コミュニティ・スクールの推進」

宇部市では求められる都市像を「みんなで築く、活力と交流による元気都市」と設定し、地域との共同の必要性を示しています。そこで、宇部市教育委員会の重点的取組の一つである「コミュニティ・スクールの推進」に焦点を当て改善プランを考えました。

その推進により「開かれた学校づくり」を進め、学校運営に必要な「民意」を反映させることができると考えます。

コミュニティ・スクールの必要性や目指す姿などを宇部市教育委員会内で定義し、共有する。学校や市民に向けて発信する。それ



松岡千鶴 教頭

それぞれの学校や保護者、地域の実情に合わせ段階的に推進していく。最終的に、学校運営協議会に一定の権限を持たせ、校長とともに学校の自主性・自律性の確立を図る段階まで5年間のスケジュールで達成できるように、取り組むことを提案しました。

**⑦傳法谷肇 教諭
北海道釧路町教育委員会
改善プラン**



傳法谷肇 教諭

「ステップを踏んだ『地域とともにある学校づくり』」3本の矢による、孤立化、固定化の転換」

「地域とともにある学校づくり」は地方分権あるいは地域主権の理念の中で表出したものです。

全国学力・学習状況調査や、釧路町全教職員と保護者対象のアンケート結果などから、釧路町の子どもを取り巻く環境に課題を見出しました。

文科省調査研究では「地域とともにある学校づくり」推進は「生きる力」の育成、地域の教育力向上、地域活力の向上へつながると示されています。

つながりの薄さによる「孤立

化」、低学力・低体力の「固定化」という釧路町の子どもがおかれた現状からの転換を図るために、「情報共有」、「地域との協働」、「地域との共同運営の仕組みづくり」の三本の矢（ステップ）を踏んで、「地域の子どもは地域で育てる」という根本論に立ち戻って推進することを提案しました。

**⑧黒澤寛己 教諭
京都府京都市立塔南高等学校
改善プラン**

「『塔南教師塾』『教育みらい科』の改善について」教師教育の視点から」

2007年に全国初の教員養成の専門学科として開設された「教育みらい科」は1期生が教員採用試験に7名合格するなど、一定の成果を上げています。しかし、開設から8年を経過し、近年は志望者数が停滞し、その教育内容を見直す時期にきていると考えられます。

「教育みらい科」の改善プランとしては、担当の「企画推進部」の業務改善と、専門学科「教育みらい学」の内容の深化を提案しました。

また、市立高校の現状を明らかにするため、管理職に対し「半構造化面接法」による調査や市立高校教職員に対して「非構造化面接法」による聞き取り調査を実施し、市立高校の課題を整理しました。その改善プランとして新たな教師教育プログラム「塔南教師塾」



黒澤寛己 教諭

**⑨大藪二三雄 教諭
兵庫県神戸市立大池中学校
改善プラン**

「プラットフォーム戦略による連携力育成への提案」

学校改善に対する取組の中で「連携」が必要とされている背景とそれが継続されている源泉となる有効性を検証することにも、大池中学校の課題改善に資する「連携」という手法を用いた施策の構築を行いました。

プランの方向性としては、教職員の組織力と職員個々の成果創出の指向性の向上を第一義的な目的とし、次に地域・家庭の課題、特に福祉分野に関して学校が積極的に関与する「学福連携」により、生徒や地域に関する課題解決を目指しています。

具体的には、「生徒用図書室と市民図書室の統合」「連携推進局の設置と小6交流登校」「パブリシティー機能の強化」など、地域

共助社会形成のセンター機能を学校内に構築するプランとなっています。

大藪二三雄 教諭



古屋光晴 教諭

**⑩古屋光晴 教諭
兵庫県立和田山特別支援学校
改善プラン**

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築を目指した地域支援を核として」

現任校の課題として、地域支援活動がニーズのある子どもに関する個別的なものが多く、支援した内容がその学校のものとして根付かない現状を明らかにしました。

そのため、地域の学校に特別支援教育の専門性を涵養することがインクルーシブ教育システムの構築に繋がり、それらに対する種々の支援が、現任教員の専門性向上に繋がるとしています。

具体的には朝来市すべての特別支援学級の教員が参加する市

教育委員会との共同研究や地域支援活動を可能にする組織づくりが提案され、ニーズのある子どもが必要に応じて特別支援学級や特別支援学校等を活用できるインクルーシブ教育システムの構築を目指す内容となっています。

**⑪谷田安雄 教諭
新温泉町照来小学校
改善プラン**

「新しい地域連携を核にした学校づくり」

近年の社会変化に伴う多様化、複雑化するニーズへの対応には学校と地域の連携が不可欠となっている現状を踏まえ、学校と地域が協働体制をつくる「新しい地域連携を核にした学校づくり」のプランを提案しています。

この新しい地域連携は学校と地域が目標を共有し、それぞれの役割を分担し、協働して教育目標を達成していくもので、情報や人的、物的資源を取り込み、実践し、成果を地域に返していくオープンシステムを指すものことです。



谷田安雄 教諭

その実現のため、青少年育成推進協議会などの地域連携の仕組

みづくり、教職員の意識改革、地域の声を踏まえた地域連携の評価、教育課題に対応したプロジェクトの必要性などについても解説されました。

**⑫柏崎勇人 教頭
大館市立西館小学校
改善プラン**



柏崎勇人 教頭

「『比内学』への取組を核とする地域と一体となった学校づくりの推進」

学校教育目標の具現化や子ども、保護者、地域、職員や組織の課題を踏まえ、大館「ふるさと教育」の西館小学校バージョンとして「比内学」創設を提案しました。

この比内学は、ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」の上に自らの人生の指針を描くキャリア教育を融合させ、ひとつとくり、未来づくり、地域づくりを目指すカリキュラムであり、理念でもあるとしています。

また比内学推進のため、職員の意識改革と組織の見直し、人材や地域資源の活用促進と保護者や地域の参画体制づくり、小中連携の在り方の見直しの3点が子どもたちの確かな成長に結びつく

と考え、具体的な手立てについてと説明されました。



長尾均 主幹教諭

**⑬長尾均 主幹教諭
兵庫県立西宮北高等学校
改善プラン**

「共創的な教員組織を目指す学びの場づくり」

初代教頭の「厳しく、豊かに、きめ細やかに」という言葉を共通理念として、お互いが厳しく切磋琢磨し、豊かな学びと人間関係を深めるために、きめ細かな指導を行うという方向性のもとで教員組織の改善に取組ます。

まず、現在ある「同調的な同僚性」をプラスに活用し、共働的な教員組織への変革を目指します。さらに変化の激しい社会に対応するべく、新たな知を生み出す共創的な教員組織を目指す場づくりを考えます。

プランの柱となるのは「文脈的業績による同僚性の向上」と授業研究会と学校の特色化を生かした「マイノリティ・インフルエンスによる集団力学の活用」です。また、教員の学びの「サードプレイス」を創り、対話の場を共有す

ることで同調的な同僚性から共働的な同僚性を持つ組織への変革を目指します。

**⑭小田昌史 主幹教諭
兵庫県立姫路別所高等学校
改善プラン**

「夢と希望を育む、学校行事を核とした絆共有プラン」

教師が支援し、生徒が主体となる学校行事を通して生徒同士、生徒と教師が信頼を深め、共に育つ学校づくりについて提案します。

改善プランの中心となる「学校行事」は適切に行うことでポジティブリティ（自己肯定的な心の状態）の形成効果を高め、レジリエンス（弾性力・立ち直る力）を上げる効果を引き出すことが可能になります。その他、授業の基本集団であるクラスづくりやキャリア教育としての「基礎的・汎用的能力」の一つである「人間関係形成・社会形成能力」を育む上でも有効です。さらには、地域とのつながりを広げるための有効な手立てともなり得ます。

重要なことは学校行事を核とした集団づくりが日々の授業に生かされ、授業改善につながることです。



小田昌史 主幹教諭

⑮ 福田孝善 主幹教諭
兵庫県立太子高等学校
改善プラン



福田孝善 主幹教諭

「『カリキュラム・マネジメント』をベースにした学校改善—学校改革を次のステージへ—」

学校は現在第2次改革期に位置します。「総合学科としての学力向上」をテーマとして授業改善やカリキュラム改善などについて検討を重ねています。そして現任校の現状と課題をもとに改善のキーコンセプトと捉えるべきと考えたことは「カリキュラム・マネジメント」をベースにした学校改善—です。そこで、学校改善への提言を4つに重点化しました。

先行研究等の知見からは、カリキュラム・マネジメントを有効に機能させる要因の一つは、創造的なカリキュラム文化の存在と学校文化のポジティブなあり方であるという示唆が得られています。改革のベースに「つなぐ」意識を加えることでより高みを目指したいと考えます。

⑯ 山崎信一 主幹教諭
兵庫県立猪名川高等学校
改善プラン



山崎信一 主幹教諭

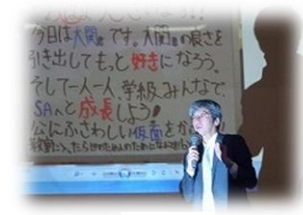
「新しいキャリア教育『猪名川夢プラン』を根幹とした学校改善」

学校の強みは文科大臣表彰を受賞したり、先進校として紹介されたりしたことのある「インターシップ」です。改善プランではこの強みを「キャリア教育」の柱として位置づけます。生徒だけでなく教員も育成できる「猪名川夢プラン」として再構成するとともに、それに伴う校務分掌の再編成や今後の学校ビジョンの再考を行い、具現化できる方策を示すことを目的とします。

「コッターの企業変革プロセス」
「7つの習慣」「ナラティブ・アプローチ」「ナレッジ・マネジメント」といった手法を活用し、「学校ビジョンの再検討」「猪名川夢プラン」(キャリア教育プラン)「校務分掌の見直し」「『風』を生かす取組」を3年かけて実施する計画を考えました。

西脇学力向上シンポジウム
2月11日(木)

今月のフィールドワーク



菊池省三氏

西脇市民会館において、「ほめ言葉のシャワーが子どもをかえり〜一人ひとりの子どもの学力を伸ばすために〜」というテーマで講演会とパネルディスカッションが開催され、学校経営コースから院生11名が参加しました。NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」や週一回開催される「菊池道場」などで有名な菊池省三氏を講師に迎え、会場は参加者で埋め尽くされました。

講演では、「ほめ言葉のシャワー」を通じた実際の取組から、その取組を成功させるための教師のかかわり方について学びました。菊池先生は、「授業」と「ほめ言葉のシャワー」を両立させながら、学級経営の土台としていると話されました。

講演全体を通して、子どもたちの成長を願う教師の意識や使命感や、子どもたち同士の横のつながりと教師と子どもとの縦のつながりをしっかり作ることの大切さを学びました。

講演後のパネルディスカッションでは、浅野良一教授がコーディネーターを務め、菊池先生に西脇市内小中高の校長が加わり、児童生徒が主体的に学び、学力を伸ばすコツについて話し合われました。「ほめる」に対して「叱る」が話題になったときには、ほめているからこそ叱ることができると話されました。そして、叱る五つのステップ(受容、反省、謝罪、改善、感謝)を基に、子どもを伸ばす叱り方についても考えました。

シンポジウム全体を通して、教えやすさに偏った教育を進めると間違った学力だけを育ててしまうことや、人のつながりをしっかり作った中で学力が育っていくことに気付くことができました。

奈良女子大学付属小学校視察
2月13日(土)

学校経営コース1年13名が奈良女子大学附属小学校の平成26年度学習研究発表会に参加してきました。

奈良女子大学附属小学校では「奈良の学習法」と呼ばれる独自の教育実践に取り組んでいます。

この学習法は、大正時代に主事であった木下竹次の指導により生活発展主義、合科主義、自立的学習という理念をもつて創始され受け継がれている教育方針のもと「しごと」「けいこ」「ななかよし」の三つの教育構造から成立しています。



研究主題、自律的に学ぶ子どもを育てる「奈良の学習法」が示すように、実際の授業でも子どもが中心に据えられ、自ら学ぼうとする意欲的な姿が見られました。特徴的だったのが、当番の子どもが授業を進行させ、話し合いで出された意見を板書しながら学習のめあてを達成させていく形態です。教師は子どもたちの学習が成立するように支援する立場に徹していました。

低学年からこのような形態が定着している子どもたちにとって学習は生活と密着したものであり、自分たちで創るものとして捉えられているはず。そして、新しい学習課題に対し、自分たちで学び合いながら解決し、活用していく力が自然に育まれていると感じました。

この独自の授業を成立させるため、教師は司会の子どもと学習内容について詳しく打ち合わせをし、綿密な教材研究や年間指導計画作成などを行っていると思われる。一般の小学校で同様の実践は難しいと思われるが、子ども本来持っている可能性を新たに発見することができました。